

○松川舟運図屏風 古泉齋

紙本著色 屏風 六曲一双

各一 一三×三三五

年代不明

宮坂考古館（米沢市）

全国的にも珍しい屏風仕立ての川絵図で、米沢藩関係者によつて、同藩の舟運関係者が利用、鑑賞することを目的として描かれたもの。

右隻の右上方と左隻の左上方に「古泉齋図之」とあり、作者は古泉齋であることがわかるが、その来歴は不明である。

描かれた年代は記されておらず、黒井堰の大樋が描かれているので、寛政七年以降の作であることがわかるのみである。

この屏風は（財）宮坂考古館の創始者故宮坂善助氏の母親が、米沢市仲町の機屋小倉某から入手したものといひ、屏風の裏面に「小国町三ノ輪主」と書き込みがあるが、小国町は宮坂家の所在地の旧町名であり、三ノ輪は宮坂家に伝わるもう一つの姓である。

右隻の右上方、糠野目から左へ描き始め、上・中・下の三段に曲流させて、左下方の新戸（荒砥）で右隻が終わっている。左隻はこれを受けて右下方、正部からはじまり、逆に下・中・上と三段に曲流させ、左上方の左沢で終わっている。

沿岸の村々の家並みや堂舎をはじめとする景觀、最上川を往来する船、川の中の岩礁や瀬・洄等々、かなり詳細に、写實的に、色彩豊かに描かれている。

難所の注記は、危険度により大難・小難・名称のみの三段階に分けて示しているのが特徴である。

荷物を積んで上り下りする小鵜飼船とみられる数多くの川船が描かれ、最上川が上流部にあつても重要な交通路であつたことがうかがわれるが、宮（長井市）のすぐ上流に二人の人足に曳かれて上流に向かつている船が見え、曳船人足に頼らざるを得なかつた最上川上流舟運のきびしい実態をうかがうことができる。

屏風に描かれている八つの札所観音はいずれも置賜三十三観音に属するもので、観音信仰と札所順札の盛行がうかがえる。

また、屏風には、川魚を獲つた築場を指すとみられる「やなは」の注記が宇津野（朝日町）および大巻（大隅、同）に、四つ手網漁をしている姿が森（長井市）付近に描かれ、さらに船衆の姿や街道を往来する人々の様子も生き生きと描かれており、この松川舟運図屏風は、舟運史上は勿論、当時の風俗を知る上でも貴重な資料といふことができる。

参考文献

金山耕三「資料紹介・最上川絵図」『山形県立博物館研究報告 第7号』山形県立博物館（昭和六一年）